

# 若江北遺跡採集の土器群について

—音村政一氏・豊岡忠雄氏ら採集資料を中心に—

若林邦彦・柴田将幹

## はじめに

2006年の7月。同志社大学文学部卒業生の音村政一氏から、同志社大学歴史資料館に資料の保管依頼があった。それらの内容は、弥生土器・土師器・須恵器・サヌカイト製打製石器で、コンテナにして3箱程度であった。音村氏は、70年代前半に本学文学部文化学科文化史専攻に所属。学生組織である考古学研究会などで活動され、現在でも考古学に深い関心をおもちである。後述するように、保管依頼いただいた資料は東大阪市若江北遺跡出土遺物と考えられ、70年代前半の河川改修工事に伴う出土資料である。

音村氏は、友人らとともに工事に際して出土していた遺物を採集し、各人がそれを保管していた。しかし、今後の資料保存のことを考え、本学文学部松藤和人教授のもとに同志社大学での資料保管の相談を持ちかけられ、その場に若林も同席した。その結果、学内の考古資料の保管・展示機関である歴史資料館への保管をご依頼いただいた。

音村氏からの保管依頼資料には、採集地点・状況が簡潔にまとめられたメモが添えられていた。それらをもとに、資料採集の状況について記載して近辺の遺跡調査成果と照合したい、あわせて資料について実測図が掲載できるものについて報告したい。なお、後述するように寄贈資料のうち、石器については他遺跡出土遺物の混入もありうるとの音村氏からのご教示があり、別の機会に報告したい。よって本稿では、保管依頼資料のうち土器についてのみ報告する。

## 1. 採集の脈略と地点

音村氏のメモには、資料採集の経緯として、「1972年春(2～4月頃)、当時八尾市在住・奈良教育大学4回生の尾崎正男氏より楠根川改修工事で川底から弥生を中心とした遺物が出土している事を聞き、同氏と私他2名(神尾恵一氏、豊岡忠雄氏)の4名で現地を訪れたのが最初」とある。それ以後、音村氏が同年に3回、豊岡氏が翌年くらいまで何度か現地を訪れて遺物を採集したという。ちなみに70年代前半当時、神尾恵一氏・豊岡忠雄氏は音村氏とともに同志社大学考古学研究会で活動されていた。

音村氏の記憶では、保管依頼資料のうち、約7割が豊岡氏採集、残り3割が音村氏の採集の資料だという。豊岡氏採集資料は、当時の瓜生堂調査会に在職されていた今村道雄氏(その後大阪府教育委員会)および国立奈良文化財研究所の佐原真氏(その後国立歴史民俗博物館館長)が確認されたという。現在では二人とも故人であり、その当時の詳細な所見についてうかがうことができないことが極めて残念である。

採集地点については、音村氏の簡潔にして要を得たメモに以下の記述があった。原文のまま引用する。

「採集場所は東大阪市若江南町3-8、楠根川に架かる巨摩橋の南西側周辺にあたる。現在『くら寿司』の店舗のある付近で、当時は建物が周辺になく更地の状態であった。その更地の場所に横に流れている、同河川川底から掘り出された黒色粘土層の土砂が、広い範囲で積み上げられていた。川底の深さは目測で5～6mであったと記憶する。その土砂の中から、弥生前期を中心とする遺物を採集した。」

楠根川改修が行われた上記地点は、現在では第二寝屋川と呼ばれている河道にあたる。記述にもとづけば、遺物採集地点およびその土砂・土器が本来堆積していた地点は図1に示した位置に相当する。現在では、若江北遺跡という名称で周知の遺跡として行政登録されている範囲にあたる。若江北遺跡は、弥生時代～中世の複合遺跡であるが、図1中で15A、16A、17A、11C、12Cと示した1995年の第5次発掘調査(三好・市本1996)では大阪平野でも最古級の遠賀川式土器が出土し、弥生時代中期末～後期前葉の集落跡や方形周溝墓の検出(三好・亀井1995)で有名な遺跡である。北接する巨摩遺跡・瓜生堂遺跡とともに弥生時代中期～後期前葉の遺跡群を形成していること(若林2001)でも知られている。

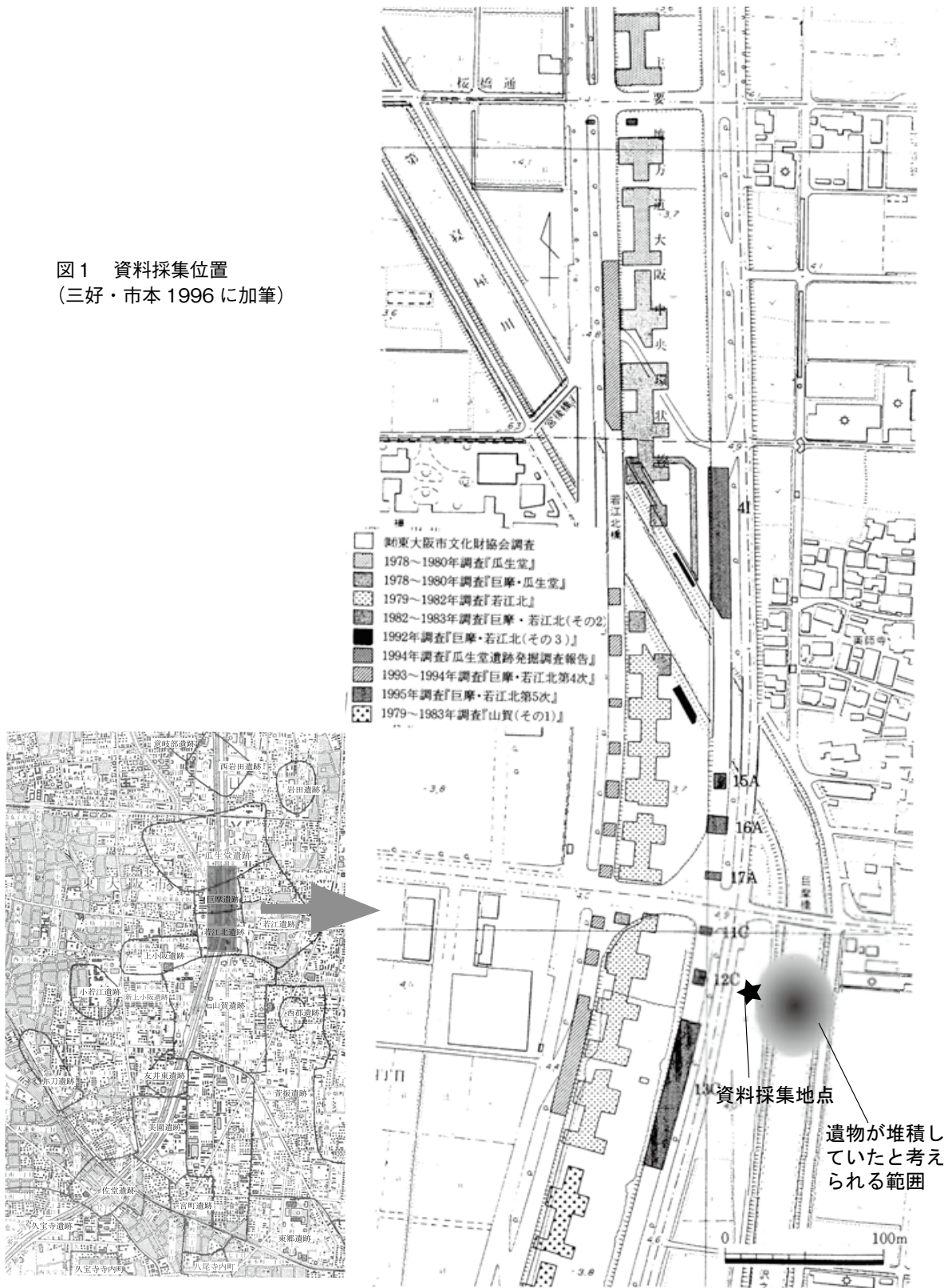
今回報告する資料は、これら近年の調査成果とどのように関係するのだろうか。音村氏メモには今回報告資料が包含されていた土層についての所見が記されている。資料採集は、遺跡そのものからではなく、すでに掘り上げられた土砂から行われたようであるが、出土遺物の主要な帰属層位を考える上で貴重な所見である。また、大阪府文化財センターによる近接地の発掘調査では、図2のような層序が確認されている。

次節に報告する遺物の主体は弥生時代前期～中期前半である。若江北遺跡のうち上記メモの地点近く(若江北遺跡第5次調査12Cトレンチ)では、A弥生時代前期前半の土器包含層、B中期前半の流水堆積砂層、C中期後半・後期前葉の遺物包含層が検出されている。報告資料のうち弥生時代に帰属する土器群に関しては、A・Bの層位に帰属する可能性が高い。このことは、メモの所見とも符合する。

遺物が出土した河川改修工事は既存の楠根川(現在の第二寝屋川)の河床を浚渫する工事と考えられる。当時の河床の深度は不詳だが、地表面から1～2m程度の深さは想定される。図2の若江北遺跡第5次調査12Cトレンチの土層断面図でみるかぎり、近接地であるの弥生後期後半遺物包含層は地表面から1.5～2mの深度で検出されており、改修工事の際にはすでに河道内では大半の土層が失われていた可能性が高い。とすると、図2にみる弥生時代中期前半の流水堆積層およびその直下に形成された暗色層からの出土品が、改修工事に伴う出土土器であったと考えられる。

もちろん、後述するように今回報告する土器群には、弥生時代中期後半・古墳時代の土器も含まれており、弥生時代前半期の土層以外からの出土品もあったと考えねばならない。しかし、音村氏メモの所見は、工事で浚渫された深度に堆積していた土層の出土遺物と符合することになる。若江北遺跡の堆積土の内、地表下約2mより下位の土層から出土した遺物群を中心とすると考えてよいだろう。この所見と、後述する今回報告土器群の帰属時期を合わせると、若江北遺跡・巨摩遺跡・瓜生堂遺跡の弥生時代の集落動態を考える上で興味深い知見が得られると考える。次節で、出土土器群を紹介したうえで、本資料の帰属時期をもとに3遺跡の遺跡動態についての私見を述べたい。(若林)

図1 資料採集位置  
(三好・市本 1996 に加筆)



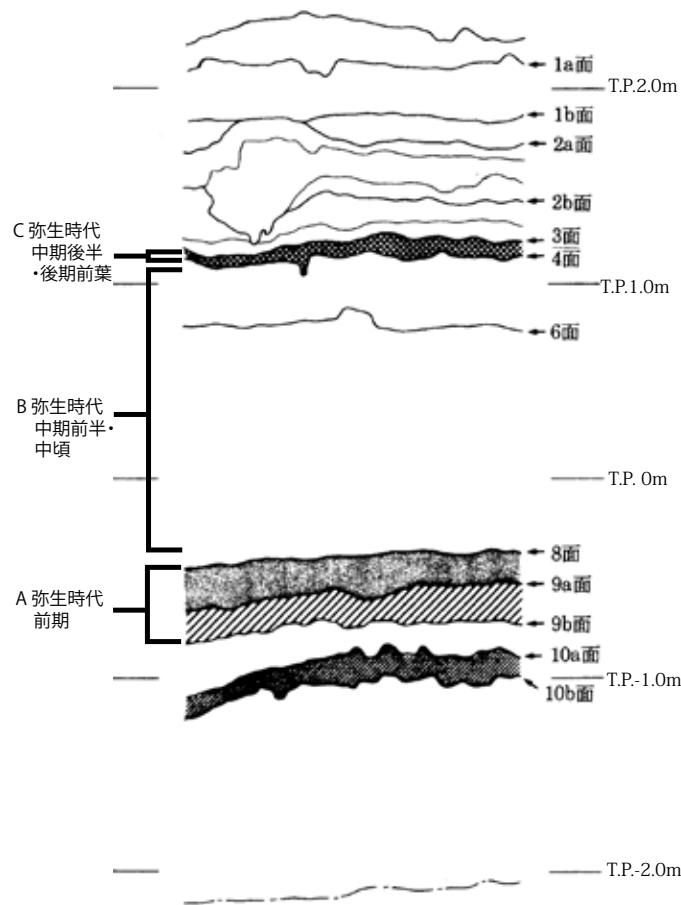


図2 若江北遺跡第5次調査 12C トレンチ土層断面図  
(三好・市本 1996 に加筆)

## 2. 採集された土器群

音村氏より保管依頼のあった土器群は破片で260点であり、そのうち33点が図化可能で時期などの判別が可能であった。ここでは、図化・時期判別の可能な個体のみを報告する。

本稿で取り扱う資料は採集品であるため、型式組成などにもとづく細別編年を適応して時期決定することは難しい。土器の帰属時期については「中期中葉」といった大別時期を用いて記述する。土器の特徴からある程度時期が絞り込める場合は、それも記述する。細別時期の時期区分は『考古資料大観』(若林2003)によった。また、古墳時代の土器については、引用文献に示した文献に沿って記述する。器種名については「甕形土器」などとすべきであるが、煩雑さを避けるために「形土器」を省略する。また、本稿では、角閃石、長石粒を含む胎土を「生駒山西麓産胎土」と認定して記述を進める。

1～19は縄文時代晩期から弥生時代前期と考えられる遺物である。

1は壺の口縁部である。短く外反する口縁部をもち、口頸部界に削出突帯が施されている。削出突帯上には篋描沈線が施されている。外面はヘラミガキ、内面はヨコハケ調整後ヘラミガキで仕上げられている。「生駒山西麓産胎土」が用いられている。

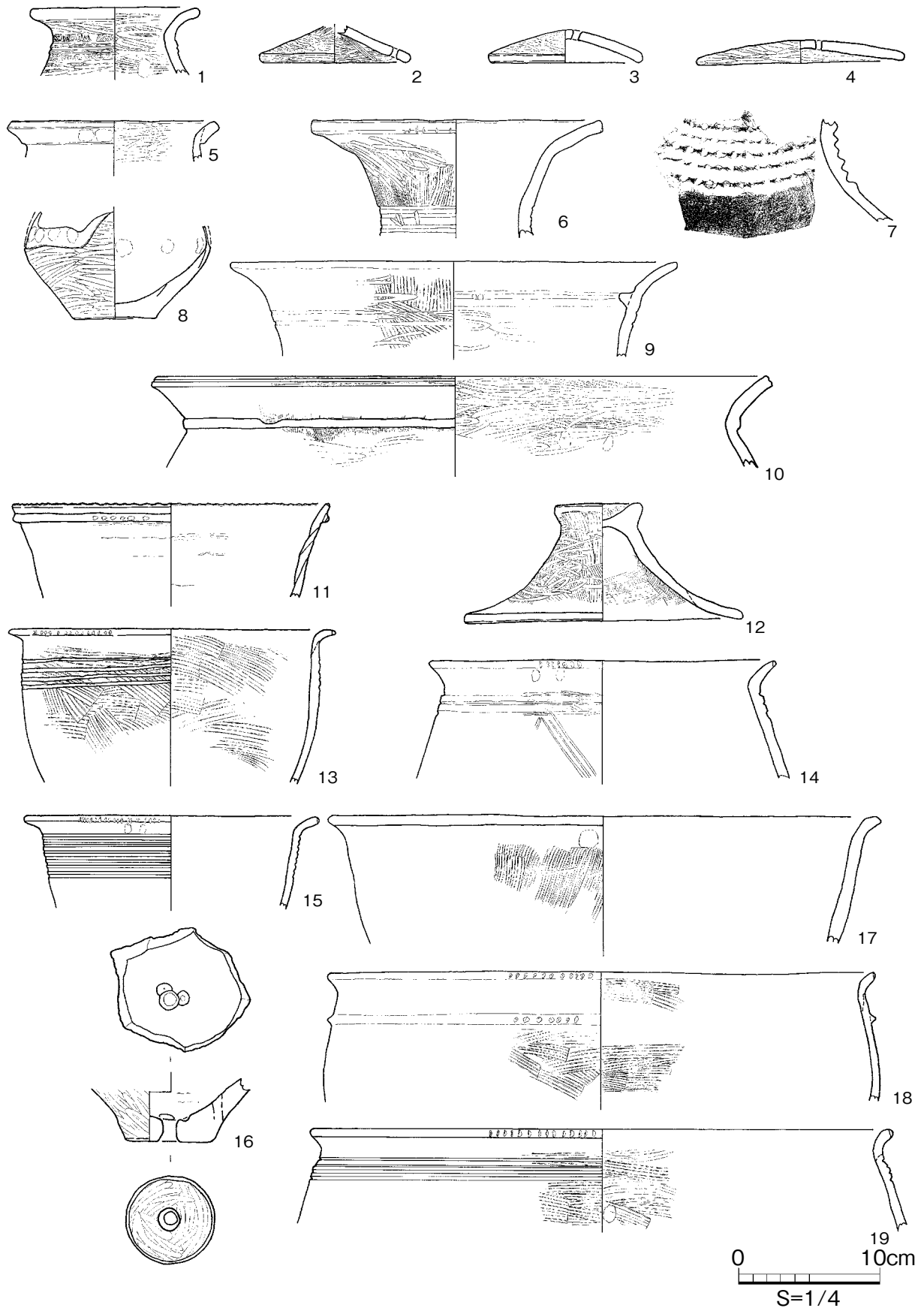


図3 若江北遺跡採集土器(1)

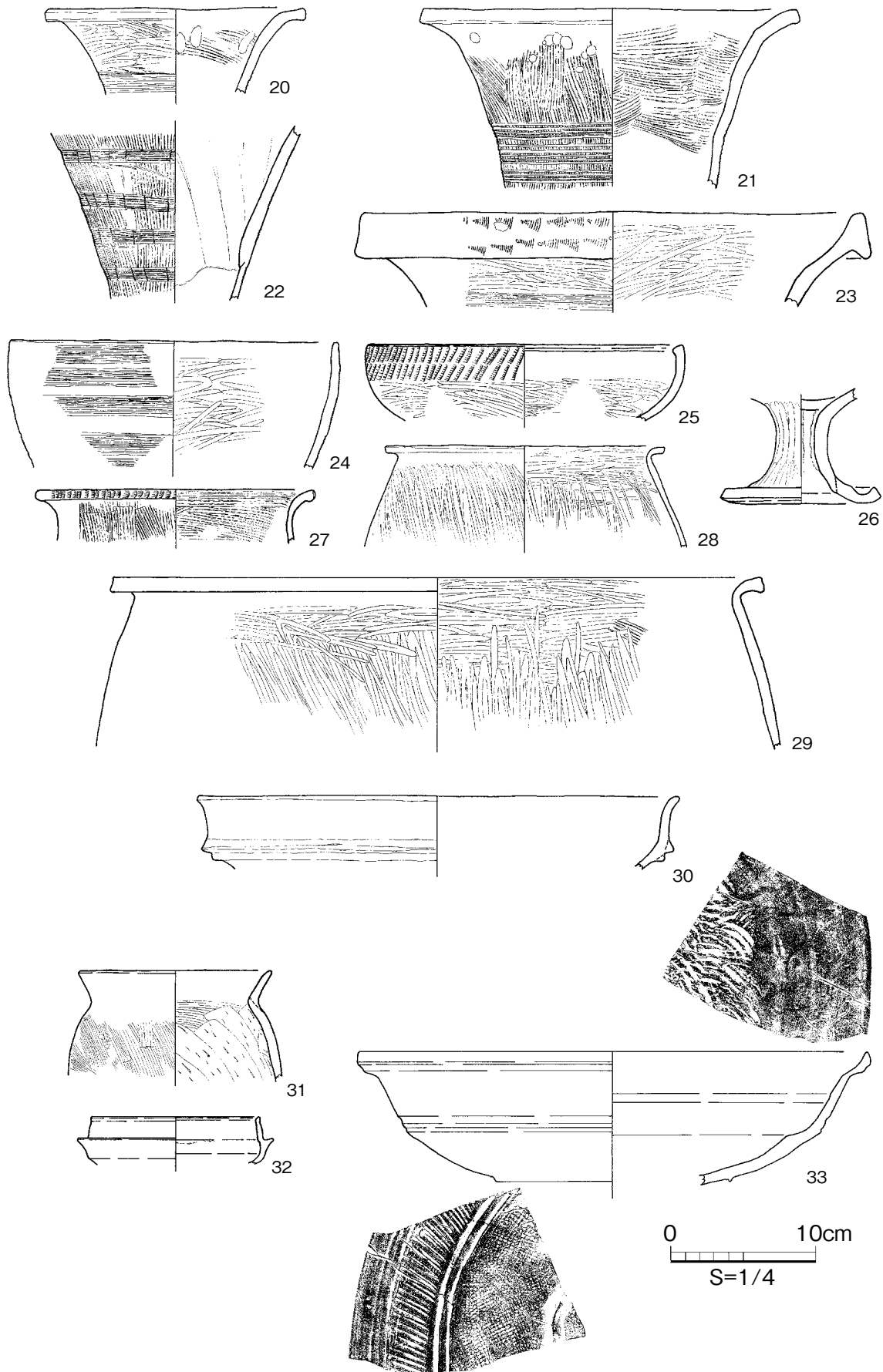


図4 若江北遺跡採集土器(2)

2～4は壺用蓋で、いずれも笠形の器形である。胎土はにぶい褐色の「生駒山西麓産胎土」が用いられている。2は内外面とも横方向のヘラミガキの痕跡がみられるが、内面に一部縦方向のヘラミガキが施されている。紐孔を一つ穿つ。3は外面にヘラミガキ、内面にナデ調整が施されている。頂部付近に紐孔を一つ穿つ。4は外面にヘラミガキ、内面はヘラケズリに後続してヘラミガキが施されている。頂部付近に紐孔を一つ穿つ。壺用蓋は弥生時代前期様相1新段階から前期様相2新段階に存在することが知られており(豆谷2008)、2～4の遺物もその時期に限定されると考えられる。

5、6は壺の口縁部である。5は短く外反する口縁部をもち、口縁部を作出する際の粘土帯接合を利用して口頸部界に段が施されている。外面にナデ調整、内面にヘラミガキが施されている「生駒山西麓産胎土」が用いられている。6は大きく外反する口縁部をもつ。口頸部界には篋描沈線が三条とその下に貼付突帯が施されていると考えられるが、最も下に描かれた篋描沈線は輪郭がやや曖昧である。また、口縁端部には刻み目が施されている。外面はタテハケ調整後斜め方向のヘラミガキがまばらに施されている。これは器面の乾燥がかなり進んだ段階でヘラミガキの工程を行ったためと考えられる。内面はヨコハケ調整である。胎土は浅黄橙色であり、長石・石英を多く含む。口縁部が大きく開き、口縁端部に刻み目をもつという型式学的特徴から、弥生時代前期後葉の土器と考えられる。

7は黄橙色で石英、雲母を多く含む胎土で製作された、壺の頸部である。少なくとも六条の指づくね突帯が施されている。突帯が多条化している点から、この土器は前期後葉の所産と考えられる。

8は壺の胴部である。外面にヘラミガキ、内面にナデ調整が施されている。胴部最大径付近で胴部上半以上が剝離している。胎土はにぶい黄褐色の「生駒山西麓産胎土」が用いられている。

9は壺の口縁部と考えられる。外面にタテハケ調整の後ヘラミガキ、内面にヘラミガキが施されている。その後外面に篋描沈線が二条、内面に刻み目突帯が施されている。胎土は灰白色で石英、雲母を多く含む。

10は大型壺の口縁部で、口頸部界に削出突帯を作出している。胎土は褐色の「生駒山西麓産胎土」である。外面は口縁部にナデ調整を施す一方で頸部にヘラミガキ、内面はヨコハケの後ヘラミガキを施す。また、口縁端部にはヘラミガキを行った後に篋描沈線が施文されている。大型壺は前期中葉以前にのみ存在することが知られており、この個体もその時期と考えられる。

11は縄文時代晩期の深鉢である。「生駒山西麓産胎土」を用いている。内外面ともナデ調整の後に外面口縁部付近に貼付突帯が施されている。刻み目は口縁端部と突帯上にD字状の刻み目が施されており、突帯が口縁部よりやや下がった位置に施されている。

12は甕用蓋である。浅黄橙色で胎土に長石を多量に含む。外面に放射状のハケメ調整のちにまばらにヘラミガキが施されており、内面はナデ調整後ヨコハケ調整である。

13～15はいずれも如意状の口縁部をもつ甕である。13は外面にヨコハケ調整、内面にヨコハケ調整の後ナデ調整を行っている。篋描沈線が四条施文され、口縁端部には刻み目が施されている。胎土は、長石、雲母、角閃石を多量に含む「生駒山西麓産胎土」である。これらの特徴から、13は弥生時代前期中葉以降の遺物と考えられる。14は内外面ともナデ調整が確認できるが、削出突帯上にハケ調整のような痕跡がみられることから外面はハケ調整後ナデ消したと考えられる。また、突帯上には篋



描沈線が、突帯直下に篋描沈線をもちいて山形文が施されている。口縁端部に刻み目が施されている。胎土は「生駒山西麓産胎土」である。15は内外面ともナデ調整である。外面に篋描沈線が八条施文されており、口縁端部には刻み目が施されている。外面は黒色、内面は灰白色である。篋描沈線が多条化しているという型式学的特徴から、この土器は前期様相3もしくは中期前半様相1の所産と考えられる。

16は甕の底部である。外面及び底面はヘラミガキ、内面にナデ調整が施されている。この土器には底部穿孔が三度試みられているが、そのうち貫通しているのは一つである。また、未貫通の穿孔から、底部穿孔を内面より行っていたと考えられる。胎土は「生駒山西麓産胎土」が用いられている。

17～19は甕または鉢である。17は外面にタテハケ調整、内面にナデ調整が行われている。胎土は黄灰色で長石、石英を少量含む。18は内外面ともヨコハケ調整後、外面に貼付突帯が施されている。口縁端部及び貼付突帯上には刻み目が施されている。胎土はにぶい黄橙色の「生駒山西麓産胎土」である。19は内外面ともヨコハケ調整ののち、外面に篋描沈線が四条施文されている。また、口縁端部には刻み目が施されている。胎土はにぶい褐色の「生駒山西麓産胎土」である。

本稿で報告する弥生時代前期の遺物は前期中葉から後葉のものに限られている。資料採集地周辺では、山賀遺跡の河川7出土資料などが同時期資料として挙げられる。

20～29は弥生時代中期の遺物である。

20・21は「生駒山西麓産胎土」を用いた壺の口縁部である。20は外面にヨコハケ調整の後ヘラミガキ、内面にヨコハケ調整が施されている。また、頸部には櫛描直線文が施されている。21は外面にタテハケ調整、内面にヨコハケ調整を行っている。外面には調整後に櫛描直線文が施されており、三帯が残存している。これらの土器は口縁部の形態や描かれている文様などから、弥生時代中期前葉の土器と考えられる。

22は「生駒山西麓産胎土」を用いた壺の頸部である。外面にタテハケ調整後、櫛描簾状文が施文され、内面にはイタナデ調整が施されている。また、内傾接合の痕跡がみられる。22は中期中葉の土器と考えられる。

23は壺の口縁部である。内外面ともヘラミガキが施されており、外面頸部には櫛描直線文が、口縁部には扇形文が施文されている。外面は橙色、内面はにぶい黄橙色の「生駒山西麓産胎土」が用いられている。口縁部は面を作り出すように垂下しており、弥生時代中期中葉の新相を示していると考えられる。

24・25は「生駒山西麓産胎土」を用いた鉢の口縁部である。いずれも椀形である。24は外面にナデの後櫛描直線文を施文し、内面にヘラミガキが施されている。口縁部が直口であることから、弥生時代中期前葉の所産であると考えられる。25は外面に列点文を施文した後にヘラミガキ、内面はヘラミガキが施されている。口縁部が内面に折り返されたような形状を示していることから、25は中期中葉の新相である中期前半様相3から中期後葉にかけての土器と考えられる。

26は高坏の脚部と考えられる。外面はヘラミガキ、内面にはナデ調整が施されており、内面にシボリメが残存している。胎土は灰白色で長石、石英を少量含む。



27～29は甕の口縁部である。27は外面に粗いタテハケ調整の後に口縁部にナデ、内面にヨコハケ調整が施されている。また、口縁端部にはハケ工具による刻み目が施文されており、大和型甕と呼ばれるものである。胎土に石英や雲母が含まれている。28は口縁部が短く屈曲し、口縁端部に面をもつ。外面に縦方向のヘラミガキ、内面に横方向のヘラミガキの後縦方向のヘラミガキが施されている。雲母、角閃石を含む「生駒山西麓産胎土」の土器である。弥生時代中期前葉の土器と考えられる。29は口縁部が短く屈曲し、口縁端部がわずかに垂下して面をもつ。内外面とも横方向のヘラミガキの後に縦方向のヘラミガキが施されている。胎土は、浅黄色の「生駒山西麓産胎土」である。弥生時代中期中葉の土器と考えられる。

30～33は古墳時代の土器である。

30は複合口縁の甕と考えられる。内外面ともナデ調整であり、屈曲部に貼付突帯が二条施されている。胎土はにぶい黄橙色で雲母を含む。古墳時代前期の所産と考えられる。

31は古墳時代中期の土師器である。内外面ともハケ調整が施されたのち、内面をヘラケズリしている。口縁端部は丸く収められている。胎土は雲母、角閃石を多く含む「生駒山西麓産胎土」である。この個体は胴部が長胴化していると考えられることから、辻(1999)の4段階、中野(2010)の5群に比定できる。

32・33は須恵器である。32は杯身である。口縁端部にわずかな凹状の線が観察できる。受け部は小さく外上方にのびる。口縁端部の形状や口径は11.4cmであることから、Ⅱ型式1～2段階(中村1981)と考えられる。33は高杯形器台の杯部である。杯部上半に篋描斜行直線文、杯部下半に格子目タタキが施されている。(柴田)

### 3. 若江北遺跡における遺構分布

上記のように、これら土器群の主体は弥生時代前期～中期前半である。この知見をもとに、本節で若江北遺跡とその近辺における遺跡形成に言及したい。

先述のように、若江北遺跡では、第五次調査の15A地点にあたる北端部で弥生前期初頭の土器群が溝・土坑・掘立柱建物とともに検出されている(三好・市本1996)。大阪平野中部では最古級の遠賀川式土器とされてきた(若林2003)。しかし、その後その地点には後続する時期の土器群は検出されていない。八尾市田井中遺跡をはじめとする大阪平野中部の弥生前期の遺跡でも、古相の弥生前期土器が検出された地点での集落形成は短期間で、すぐに居住域が移動してしまうことが指摘されている(若林2002)。また、寝屋川市讚良郡条里遺跡でも最古相の遠賀川式土器が、溝・土坑から検出されているがこの地点も居住域形成は継続せず、数百m移動した地点に集落域が移動してしまう(中尾2009)。筆者はこのような傾向から、縄文晩期末の突帯文土器期～弥生時代初頭の集団は零細で、頻繁に移動を繰り返していると指摘した(若林2002)。

ただ、田井中遺跡・讚良郡条里遺跡では、弥生時代初頭には数百m圏内で居住域が移動を繰り返し、そのような移動は、少しずつ存続期間を長くしながらも弥生時代中期半ばまで継続していくようにみえる。つまり、少しずつ安定化していきながらも、数百mのテリトリーで移動を繰り返す集落形成パ

ターンが読み取れるのである。

このような、他の遺跡の知見に比べ、若江北遺跡の近辺には、遺跡北部初期遠賀川式土器出土地点からの居住域移動の実態は不分明であった。若江北遺跡に北接する瓜生堂遺跡では、北東部に弥生前期～中期にかけて居住域が連続する領域がみられる(秋山・川瀬2004)。また、南接する山賀遺跡でも弥生前期中葉(若林2003編年の様相2段階)以後に弥生中期前半まで地点を少しずつ変えながらも居住域形成が連続している。若江北遺跡の初期遠賀川集団のみが、近接地に後続する弥生集落形成が認められなかった。弥生前期中葉～中期前半については、水田畦畔の検出が断片的に認められる程度で、この領域での継続的な居住域形成は認められなかったのである。若江北遺跡第5次調査の出土遠賀川式土器は、そこで遺跡形成された直後に大きく居住域を移動させて、初期の領域は無人の地となったとの推測も成り立ちうる状況であった。

しかし、本稿で紹介した遺物の存在は、約100～200m離れた地点に後続する居住域形成が連続している可能性を示唆している。出土遺物の量は浚渫土砂からの表採品だけで30点にもおよび、各個体



図5 河内湖南遺跡群の弥生前期～中期への変化

の残存状態も良好である。出土土器の帰属時期それぞれに、居住域形成があったと考えることが自然であろう。このように考えれば、初期遠賀川式土器を製作・使用し始めた集団は、やはり大きく領域をかえずに近接地で連続的に居住域を営む例が一般的であったと推測できよう。

上記の若江北遺跡とその周辺の居住域形成地点の概略は、図5に示している。この領域は、多くの発掘調査が行われ、詳細な調査データが公開されている地域である。弥生時代の遺構形成の分布やその変遷を知る上で格好のモデル領域と言えよう。先述のように、弥生時代前期から中期前半には、瓜生堂遺跡北東部に一定領域に連続して居住域形成がみられ、同じことは山賀遺跡の中央領域付近と東半部にもうかがえる。極めて狭い300～400mの領域で居住域が連続展開するのである。そして、本稿で示した資料をもとに居住域の存在を類推すれば、若江北遺跡北東部にもそのような遺跡連続領域が確認できる。このようにみると、大阪平野中部の河内潟南岸の遺跡群には、遺跡が連続する小領域が数百mの間隔をおいて分布する景観だったといえよう。

## おわりに

以上、音村政一氏・豊岡忠雄氏採集の土器群を紹介し、そこから類推できる弥生時代前半期の若江北遺跡周辺の遺跡動態に言及した。採集資料であっても、周囲の遺跡調査データを加味することによって、遺跡・集落動態を論じる上で貴重な資料になると考える。本稿がそのような遺跡群復元の一助となれば幸いである。

また、音村氏より保管依頼をうけてから、すでに6年の歳月が経ってしまった。本来であれば依頼直後に行うべき資料紹介がこのように遅れたことは、本館の責任でもある。大変申し訳なく感じるとともに、とにかくもその一部についてこのように公開できたことには安堵の念をおぼえる。今後は、まだ公開していない石器資料についても図化作業を進めて資料紹介していきたい。(若林)

## 引用文献

- 秋山浩三・川瀬貴子編 2004『瓜生堂遺跡1』(財)大阪府文化財センター  
 石上幸子編 1991『河内平野遺跡群の動態II』(財)大阪府文化財センター  
 辻 美紀 1999「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室  
 中尾智行編 2009「讃良郡条里遺跡IX」(財)大阪府文化財センター  
 中野 咲 2010「古墳時代中・後期における奈良盆地の土師器編年とその特質」『考古学論攷』第33冊  
 中村 浩 1981『和泉陶邑窯の研究』柏書房  
 豆谷和之 2008「前期弥生土器再編」『考古学雑誌』55-3  
 三好孝一・亀井 聡 1995『巨摩・若江北遺跡発掘調査報告書—第4次—』(財)大阪府文化財調査研究センター  
 三好孝一・市本芳三編 1996『巨摩・若江北遺跡発掘調査報告書—第5次—』(財)大阪府文化財調査研究センター  
 若林邦彦 2001「弥生時代大規模遺跡の評価」『日本考古学』第12号 日本考古学協会  
 若林邦彦 2002「河内湖沿岸における初期弥生集落の変遷モデル」『環瀬戸内海の考古学』古代吉備研究会  
 若林邦彦 2003「近畿地方の土器」『考古資料大観』土器I 小学館